

“我が子”は“我”である

「年々歳々、花あひ似たり。歳々年々、人同じからず」と言って、昔の詩人は人の世を嘆いたが、それは、草木の一世代である“年”を単位にして人の世を見たからである。“人の世”は、“世”といふ文字が示してゐるやうに“十”といふ文字が三つ重ねられた文字であって、“三十年”を意味した文字である。人間は、三十年経つと、現在の自分の親の年齢に達することで、“三十年”が、人間の“一世代”であることが解るであらう。

ここに、七十歳前後の老夫婦が住む家があったとしよう。その息子夫婦は大よそ四十歳前後であり、十歳前後の子供を有つ親であるのが普通である。それから、三十年後にはその家はどうなつてゐるであらうか。十歳だった子供は四十歳になり、三十年前の自分とそっくりの十歳前後の子供の親になつてゐるはずである。そして、四十歳前後だった息子夫婦は七十歳になり、三十年前の両親とそっくりの風貌の老夫婦になつてゐるはずである。

このやうに、「歳々年久人同じからず」と見える人間も、“三十年”といふ単位で見ると、「人あひ似たり」であつて、少しも嘆くには当らないのである。草木は、春が来れば新芽を出し、若葉となり、花を咲かせるが、

秋になればすっかり枯れ落ち、冬は蕭条たる有様になる。然し、間もなく春が巡り来つて「年々歳々、花あひ似たり」といふ事になるのである。それと同じやうに、人間も三十年といふ単位で、草木の一年に当ることを繰返してゐるのである。

花は咲き、花は散つても、次の年には、その花が結んだ実から新しい芽を出して、また花を咲かせるやうに、人間も、自分の世を精一杯生きてこの世を去つて行くのであるが、新しい生命をこの世に残し、その新しい生命により一層充実した人生を期待するのである。昨年の花と今年の花とは、生命としては一つにつながつてゐるやうに、“我”と“我が子”とは一つにつながつた生合体である。

“我が子”は“我”の生命の延長であり、“我”の“より良き我”である。だから、“精神”を有ため禽獣でさへ、“我が子”が危険にさらされれば、“我が身”を捨ててもこれを救はうとするわけである。人間の親としては「自我の実現」である子育てを厄介視するやうでは、「禽獣にも劣る者」と、大いに責められて良い。